

**WE認証者が600人超在籍する企業  
「山九(株)」の取り組み**

《西日本能力開発センターを訪ねて》

**山九グループ**

## 溶接技術に関する組織体制、溶接センターと両輪

山九グループの溶接技術に関する組織体制は、技術開発本部品質保証部溶接センターと、東日本・西日本能力開発センターが両輪となる。溶接センターは、職場の溶接管理技術者への技術的アドバイス、溶接関連工法の開発、社内溶接競技会の事務局などとして機能する。能力開発センターはアーク溶接特別教育、階層別技能研修、溶接技能者評価試験の技能指導、社内溶接競技会の運営などに携わる。



全 33 の溶接ブースを設ける  
(北九州市八幡西区、西日本能力開発センター)

### ●溶接センター

溶接センターは同社グループの接合・材料技術の中核部門の役割を担う。広くプラント建設・メンテナンス業界の技術動向を把握し、技術競争力向上のため、長期的観点から、グループ機工事業を支える接合・材料技術を開発する。使命達成のため学協会、大学、公設研究試験機関などとの連携を強化。グループが保有する重要溶接技術（施工力）の維持、向上施策について企画、推進する。

同センターは現場の溶接士を含め7人で組織する。九州工業大学とは産学連携でレーザとアークのハイブリッド溶接の研究開発に携わる。技術・開発本部主管案件で取り組んだ成果を現業部門にフィードバックするのも同センターの役割である。

溶接センター長でIWE（国際溶接エンジニア）資格を持つ古川克彦氏は、同センターが運営する溶接技術委員会について、こう説明する。

「各支店の担当者が年2回集まって、現場の技術課題を集約する。若手溶接技術研究会は2015年度から第4期に入る。年7-8回、入社4年目の若手約20人を集め、半日の会議で鉄と化学の各グループが課題解決に取り組み、溶接技術者の育成を図る」

技術系新入社員の1年間の基礎研修では、3-4日間の溶接講座を担当する。「WEのテキストをわかりやすくした内容で概論や非破壊検査、安全衛生など溶接とはどういうものか講義する。実習は能力開発センターが担当する」

技能の研鑽に関しては、全社仕上げ技能競技大会、全社溶接競技大会の運営を担当する。

「プラント工事・メンテナンスの重要な技能である『仕上げ』のレベルアップと裾野の拡大、後継者への技能伝承を目的に掲げる。溶接は1977年から全社競技大会を開催している。2008年にはグローバルな事業運営に対応できる人財育成を目指し、参加対象を海外現地法人の従業員にも拡大した『山九グローバル溶接競技大会』を開催した。14年度で全社溶接競技大会は第31回を数え、第35回が次回グローバル大会になる」



古川克彦溶接センター長



小林秀稔指導員（左）と斎藤幸一指導員（右）

## ●能力開発センター

サンキュウリサーチアンドクリエイトの東日本・西日本能力開発センターは、高度に熟練した技能集団の育成およびハイテク技術にも対応できる先進的技術者の育成を目指す。技術・技能研修、技能士および各種溶接受験準備研修、安全衛生教育、施設提供および講師派遣などを行う。

今回訪問した西日本能力開発センター（北九州市八幡西区）には全33の溶接ブースが設けられ、製缶、据え付け、仕上げなどを含めた研修のための充実した設備が整っている。

西日本センターが誇るのは「スーパー技能者」（前出の松尾氏）の存在である。

「北九州市がものづくりに関わる高度技能者を『北九州マイスター』として認定、表彰する

制度。当社関係者は溶接の部門で2人認定されている。北九州マイスターは、資格取得にあたってのアドバイスのほか、企業や工業高校への指導など技能伝承を通じて地域にも貢献する。若手にとって目標になる貴重な存在である」(松尾氏)

西日本センターの小林秀稔指導員は北九州マイスターに加え、九州溶接マイスター(日本溶接協会九州地区溶接技術検定委員会)、ものづくりマイスター(厚生労働省)にも認定される正にスーパー技能者である。

「新入社員研修でアルミのティグ溶接と半自動のマグ溶接を、また大卒の研修では溶接の実技とアーク特別教育を担当する。溶接技能者評価試験は年2回、当センターが会場となり、100-120人が受験する」

斎藤幸一指導員は昨年4月から同センターに配属となった。社内ではマイスターの称号を受け、山九の「匠の技」として後継者の育成に努める。もともと現場ではチームリーダーを務めており「指導員としては見習い中であるが、今後指導機会が増えると思う」

小林指導員は三つのマイスターを持つ身でありながら決して奢ることなく「溶接には答えがない」と話す。

「基本に沿うように指導するものの、あくまでポイントであって答えではない。言葉にするのは難しい。ただ、実際に溶接を見る機会があれば、運棒の速度や棒の角度など指摘できる部分は多くある」

これまでの指導経験を踏まえ「溶接に興味を持つ人は上達が早い」と指摘する。

「北九州市長賞も授与される県の高校生競技会の参加選手を来週指導することになっているが、これまでも指導によって高校生の技能は格段に上達している」

斎藤指導員も「基本」を重視する。

「まずは溶接の基本を覚えてもらうこと。個人差があっても早い人は目に見えて上達する」  
最後に指導に当たって喜びを感じる瞬間を聞いた。

「あるとき高校生から評価試験に合格しましたという電話をいただいた。市の依頼で指導しただけで『あなたが努力されたから』と応じたが、手助けができてよかった」(小林指導員)

「研修を通じて上達した人を間近で見ていると、しっかり教えればできると充実感を感じる」  
(斎藤指導員)

西日本能力開発センターには溶接の核心にふれる指導者が温かい眼差しで次世代の技能向上を支援している。